【事前課題６】　更新研修演習で使用しますので、事前に読み込んでおいてください。（提出不要）

～スーパービジョンの実際～

<事例>　瀬戸さん：支援員（女性）支援業務１年目　２８歳
浜地さん：支援員（女性）支援業務１０年目　４８歳
白峰さん：サービス管理責任者（男性）
阿利布さん：利用者（女性）

瀬戸さんは相談支援専門員だったが、直接支援がしたいとの想いから配置転換を願い出て、今年度から利用者の直接支援を担当する支援員になった。相談支援専門員の経験を生かし、利用者の立場と視点から支援を考え、支援の質を向上させたいと仕事をこなしていた。

ところが最近、なぜか元気がない。サビ管の白峰さんがそれとなく「どうしたの？」と尋ねると「個別支援会議で決められたことが、なかなか職員間で共有されなくて、困ってるんです。」と話し始めた。

「昨日の早出で出勤した時、利用者の阿利布さんの起床介助をしたら、阿利布さんは夜間もオムツを使用しないことになっているのに、誰かがオムツを着けていました。昨日の夜勤は浜地さんだったので聞いてみたら『夜間はオムツを使用することになっていると他の職員が言っていたので、オムツを使用したよ。』と答え、『へ～、夜間はオムツを着けないんだ？そんなこといつ決まったの？』と普通に言われました。私が『この前の個別支援会議で決められたでしょ。』と言うと『私、出ていないから、そんなこと知らないわよ。』と言って足早に行ってしまいました。」

「私は利用者の支援を統一するために個別支援会議をしていると思っていたのに、そこで決められたことが職員間で共有されなければ、何のために会議を開いているのかわからなくなってしまいました。」と、思いつめた表情で話をした。

白峰さんは当日の夜勤者の浜地さんと面接を行った。「阿利布さんの支援について、支援会議で決められた内容は知っているの？」と聞くと「知っているけど、夜間に数回起こして、ポータブルに誘導するより、ぐっすりと眠ってもらう方が大切だから、オムツを使用しました。」と硬い表情で答えた。「そうなんだ、だったらそのことを支援会議で伝えてあげたら良いのに。」とアドバイスすると「瀬戸さんは自分が相談支援専門員だったからって、今までのやり方をみんな変えようとしてるんです。支援員としてはまだ、新人なのだから、今までやり方を尊重すべきなのに。」と瀬戸さんに対する批判を始めた。

状況はある程度把握できたが、白峰さんは瀬戸さんに何も説明しないまま数日が過ぎてしまった。瀬戸さんが「どうしても他の支援員とうまくいかない。」と、再び相談に来た。

サビ管業務としてスーパーバイザーの役割を担うあなた(白峰さん)は、瀬戸さんと浜地さんに対してどのようなスーパービジョンを行いますか？